

川越的高層建築構成法

～屋根・街路・中庭で培われた歴史性と柱梁で育まれる先進性が融合する街～

埼玉県 川越市

埼玉県の南西部に位置し、人口は約35万人。東武東上線、JR川越線、西武新宿線の3路線が利用でき、池袋や新宿から電車で約30分から45分程度でアクセス可能な場所にある。

伝統的建造物群保存地区(伝建地区)

川越には、約7.8ヘクタールの範囲で伝統的建造物群保存地区が存在する。

地区内に見られる建築様式の特徴

- ①蔵造り町家：外壁等の主要部を土で塗籠め、土蔵造りとした和風町家
- ②真壁造り町家：蔵造り町家以外の和風町家
- ③洋風町家：洋風建築の意匠を通りに面する外観に採用した町家
- ④和風住宅：伝統的な形式を受け継いでつくられた住宅
- ⑤洋風住宅：洋風建築の意匠を外観に採用した住宅
- ⑥近代洋風建築：欧米の影響を受けた近代の洋風建築
- ⑦その他：社寺建築、時の鐘など

伝統的建造物・環境物件

この地区には135件の伝統的建造物と、景観を構成する環境物件が3件指定されている。

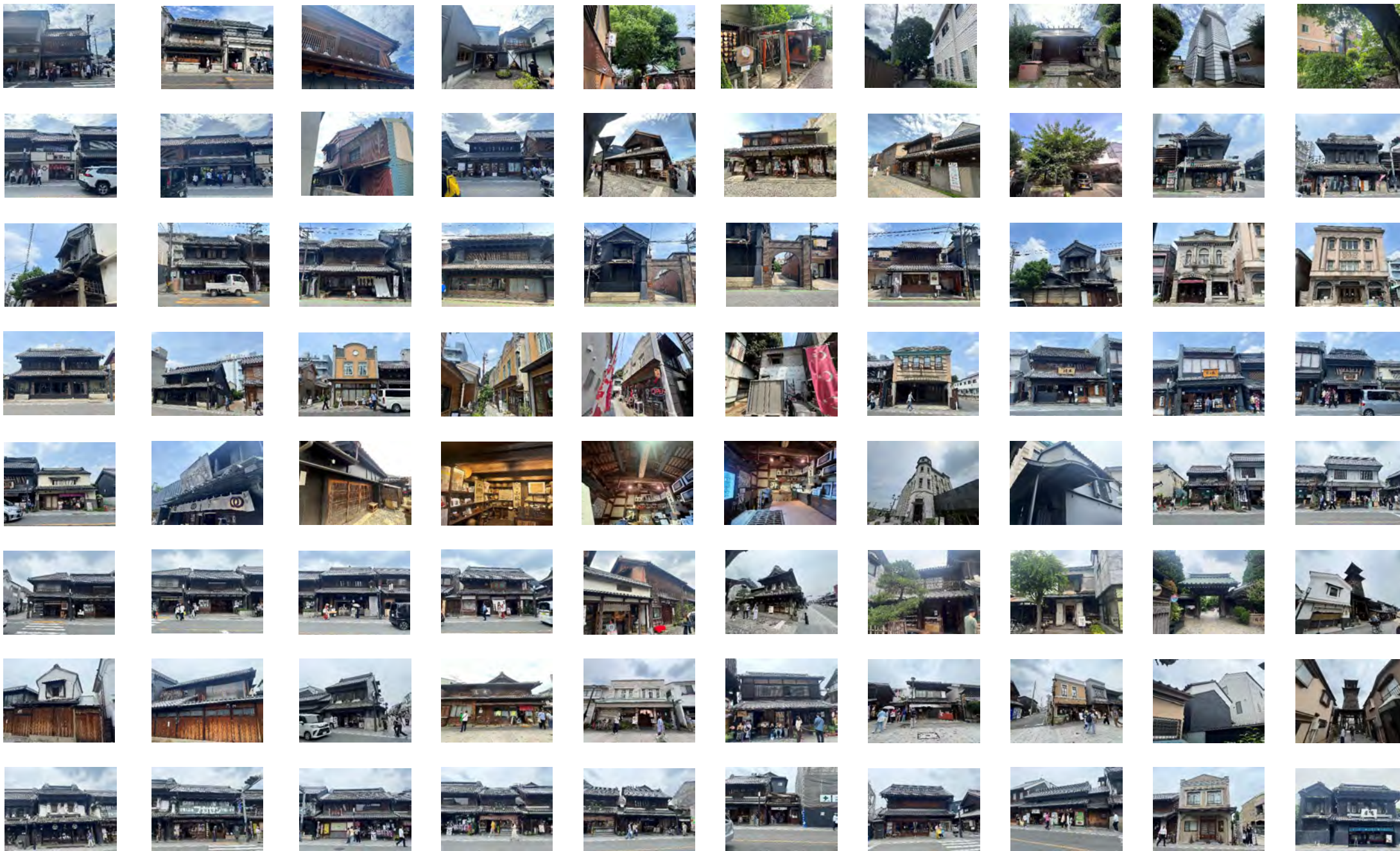


時の鐘

02 調査

伝統的建造物群保存地区の調査

伝建地区に実際に足を運び、すべての対象建物について現地調査を実施。外観写真の撮影に加え、入れる建物については内部にも入り、店舗の方にお話を伺うなど、聞き取り調査を行った。建物の現在の用途、2階部分の用途、屋根、ファサードといった点に着目して調査を行った。





小林家住宅(店蔵)

1階は和菓子屋、2階は畳の空間で従業員の休憩室や物置として使われている。



小谷野家住宅(店蔵)

1階右側は美術表具店、左側はレンタルしている。2階は作業所と住居として使われている。



平岩 矢萩両家住宅(主屋)

1階右側は服屋、左側は理容室。2階は元々ギャラリーだったが、現在は使われていない。



滝島家住宅(店蔵)

1階はビール販売店として建物を借りている。2階は現在は使われていない。



滝島家住宅(店棟)

1階は左右に店舗が分かれているが、どちらも菓子屋、2階は物置として使われている。



旧笠間家住宅(店蔵)

1階は川越の観光案内所、2階は畳だが床が脆くなり、使われていない。



小高家住宅(主屋)

1階右側は雑貨店、左側はコーヒーショップとして利用されている。2階は物置として使われている。



粟生田家住宅(主屋)

1階は帆布店、2階はスタッフルームや物置として使われている。



松ヶ角家住宅(主屋)

1階は雑貨店、2階は不動産会社の事務所として利用。建物全体は不動産会社の所有物である。



小鹿野家住宅(主屋)

1階は和菓子屋、2階は住居として大家が住んでいる。



金大(主屋)

1階と2階左側はトルコ雑貨店、2階右側はアパートとして使われている。



落合家住宅(店棟)

1階は鯉節専門店、2階は住居として、店主とご家族が住んでいる。



星野・田中両家住宅(店棟)

右側1階は和菓子屋、2階は住居として利用され、左側1階は団子屋、2階は吹き抜けとなっている。



勝冶家住宅(店蔵)

1階手前は木製雑貨店、奥はうどん屋となっている。2階はカフェだが現在は営業していない。



斉家住宅(店蔵)

1階はお香の店、2階は店の事務所として使われている。

伝統的建造物群保存地区の境界

道路を1本挟むと、低層の町並みから切り替わるようにマンションなどの高層建築物が建ち始める。



設計対象敷地

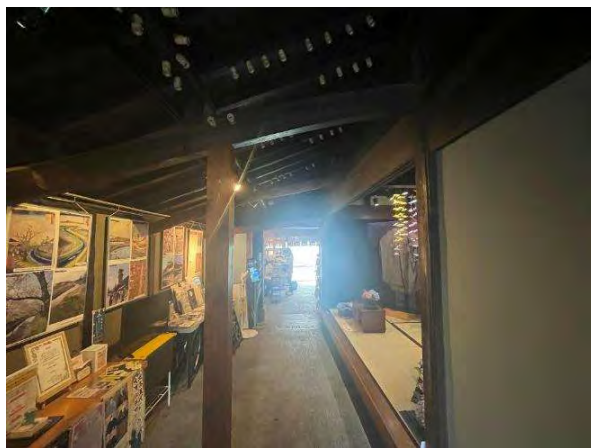


対象敷地：埼玉県川越市仲町5
敷地面積：約4000m²
敷地概要：伝統的建造物群保存地区の道路を挟んだ向かい側であり、低層の歴史的な建物と現代的な高層マンションが隣接する境界にある

02 空間構成手法 川越の街を魅力的にしている建築要素を抽出し、高層化する

歴史性に依拠した構成5要素

伝統的建造物群保存地区の調査によって抽出した、街を魅力的にしている歴史の5要素を活用する。保存地区内の建物に共通する①奥行きのある空間構成、②勾配屋根、③中庭、④街路、⑤下屋庇を設計手法の基礎とし、川越らしい高層建築の構成方法を編み出す。



①奥行きのある空間構成



②勾配屋根



③中庭

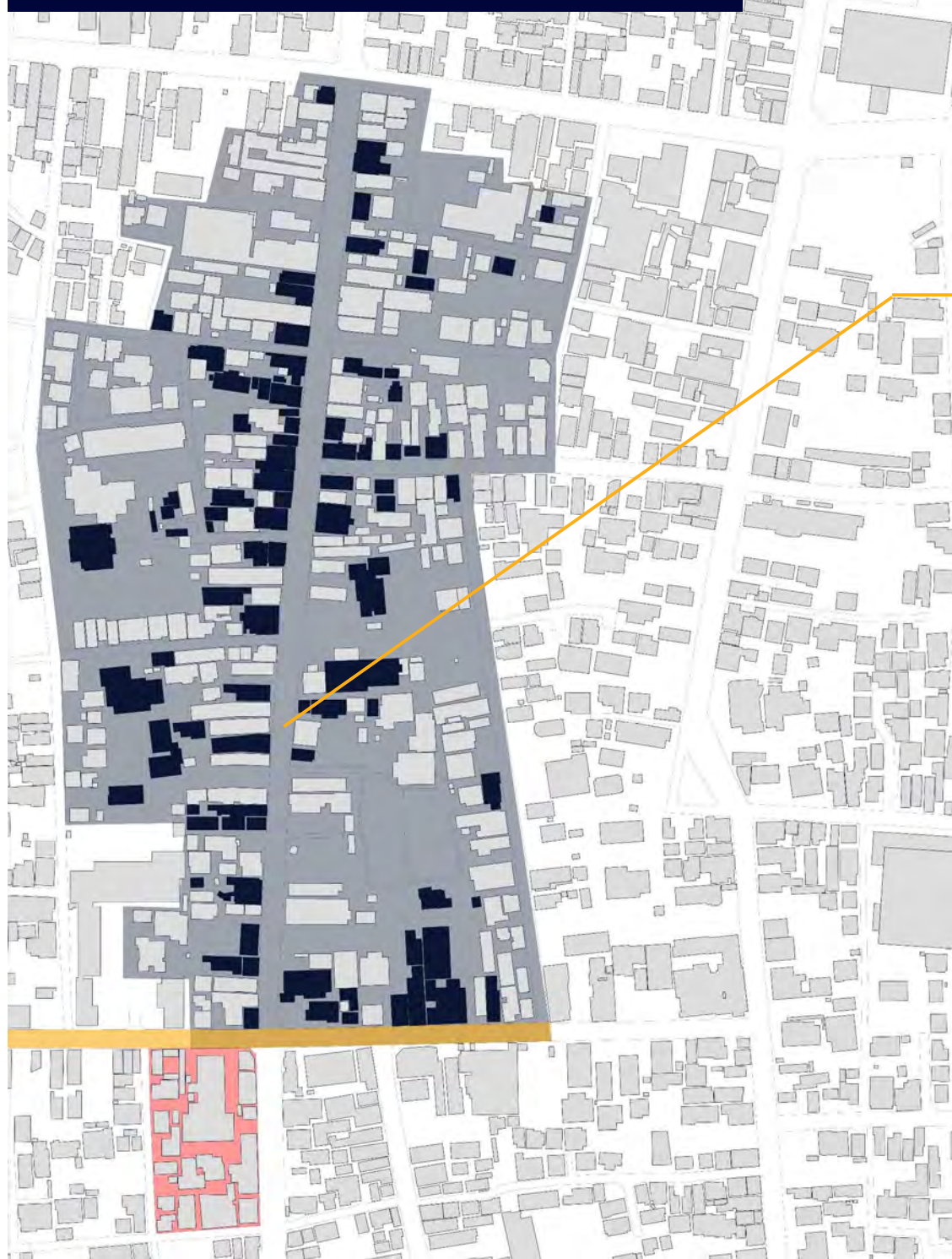


④街路



⑤下屋庇

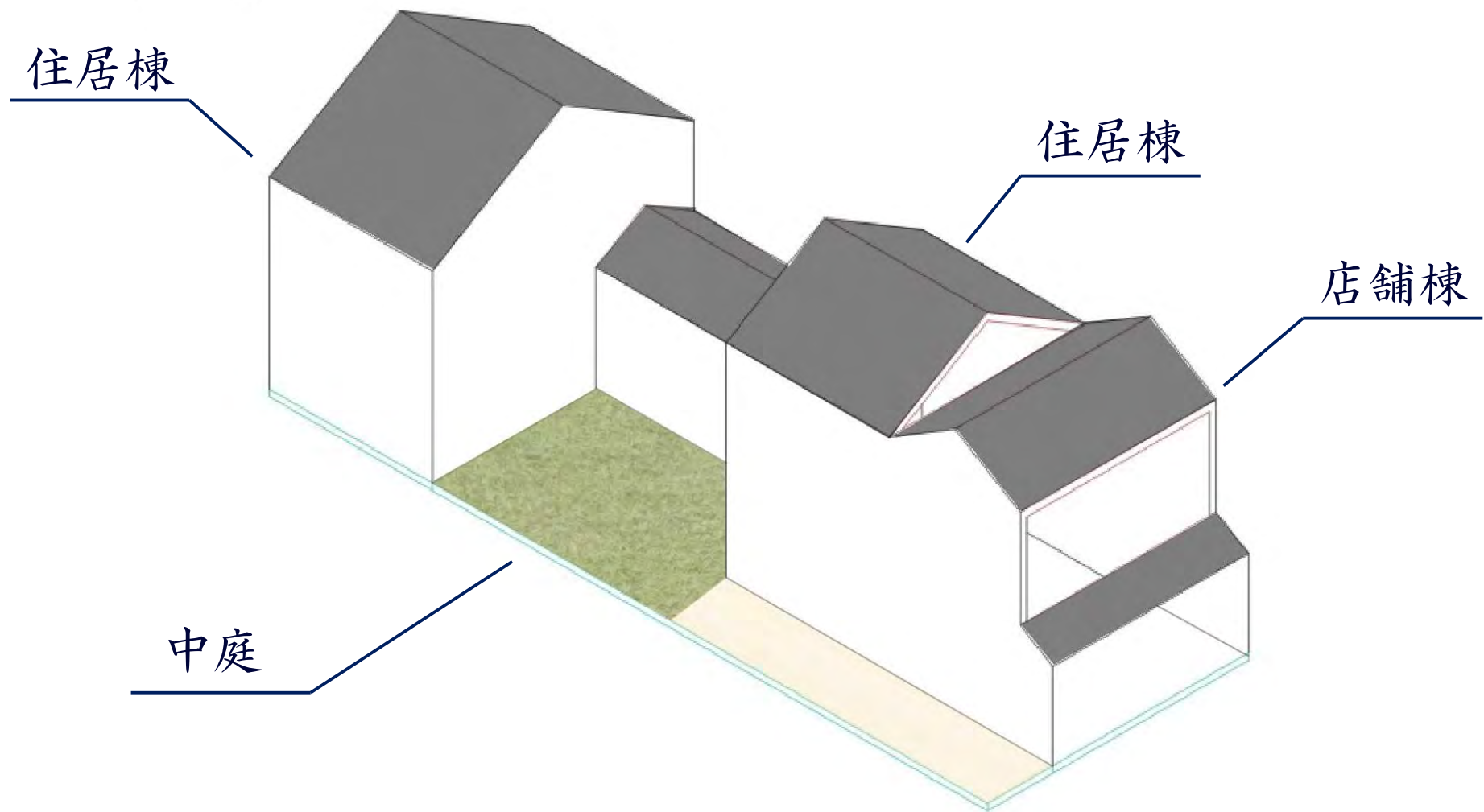
03 設計手法 奥行きのある空間構成



保存地区内は、
大通りに対して敷地が
東西に長く、短冊型の
敷地が多い。



敷地に合わせて、建物の間口が狭く、
奥行きが長くなる。



伝統的建造物群保存地区内で見られた、店舗棟・住居棟・中庭・住居棟といった、奥行きのある空間構成を基本のユニットとする。

03 設計手法 奥行きのある空間構成

このユニットは伝建地区内における伝統的建造物の間口や奥行、高さの平均値を参考にしており、歴史的なスケールを現代的な建築に適用している。中庭に面した住居棟に、開口や2層吹抜けの空間をつくることで、ユニットと中庭、街路との関係がより密接になる。



住居棟②

中庭

住居棟①

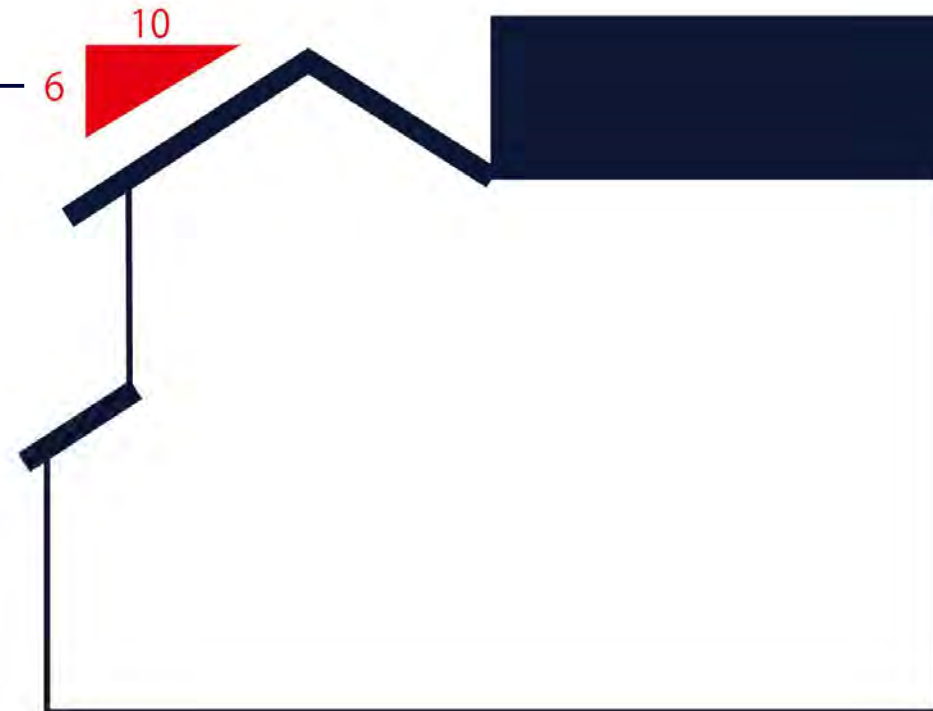
店舗棟

04 設計手法 中庭、勾配屋根

伝統的建造物群保存地区内では、切妻屋根や寄棟屋根において、屋根の勾配が6寸勾配に統一されていることで、街並みが揃っている。



6寸勾配の屋根を利用し、
屋根を伸ばす手法を用いて
ユニット同士を繋げる





屋根の一部を棟からは上方に、軒からは下方に伸ばし、
中庭の側面もしくは吹抜け部分で繋ぐ。



中庭の共用化を図る

中庭

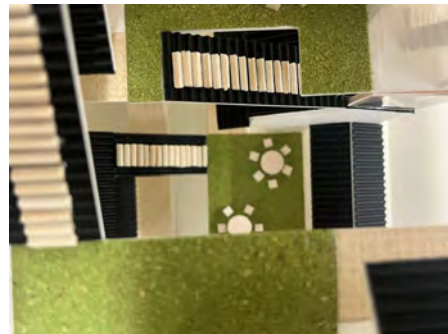
中庭ではコミュニティスペースや外部ライブラリーなど、住人と来訪者の交流拠点となっている。



04 設計手法 中庭、勾配屋根

繋がる屋根

住人の移動動線となる。



留まる屋根

屋根にスラブを張ることにより、住人たちの「たまり場」ができる。

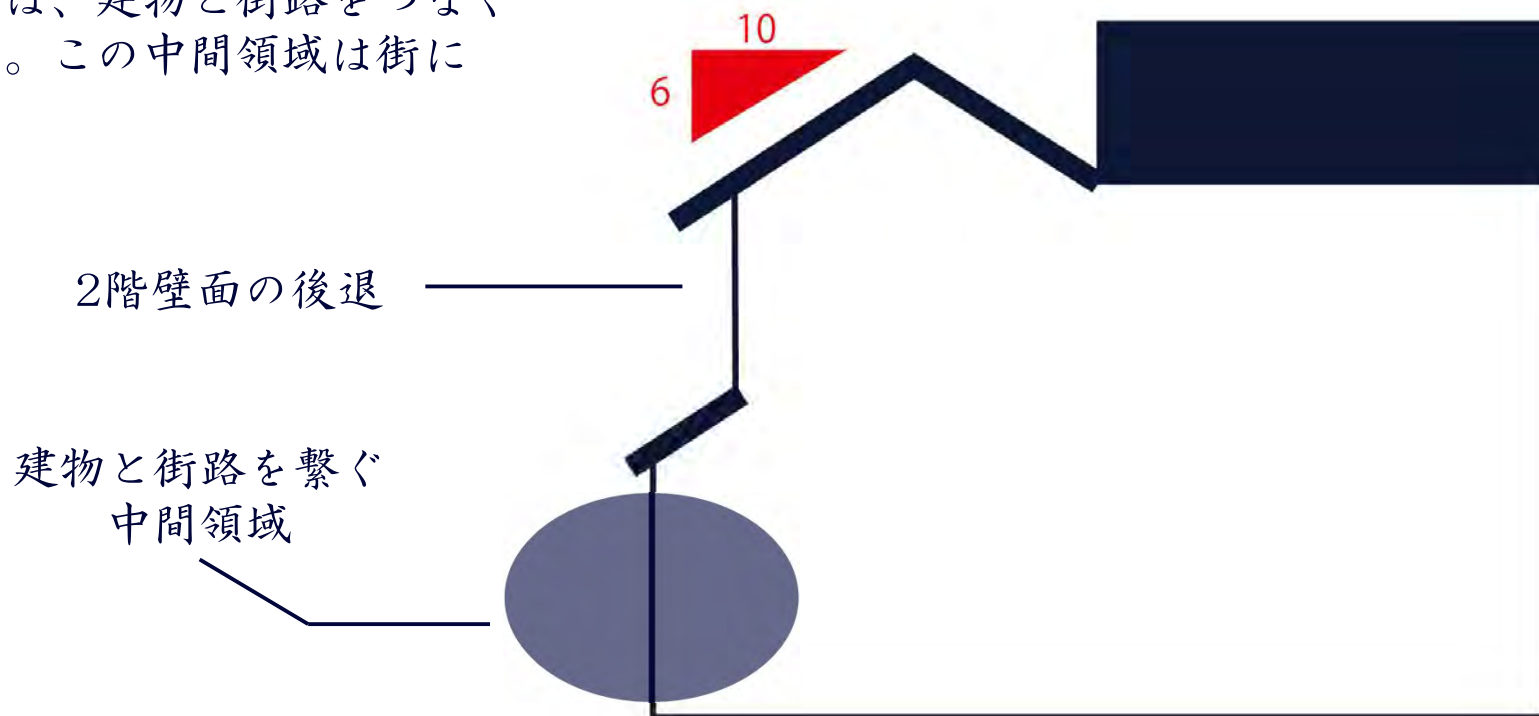


05 設計手法 下屋庇

保存地区内では、建物の2階部分が街路側から後退することによって、下屋庇の空間が生まれている。

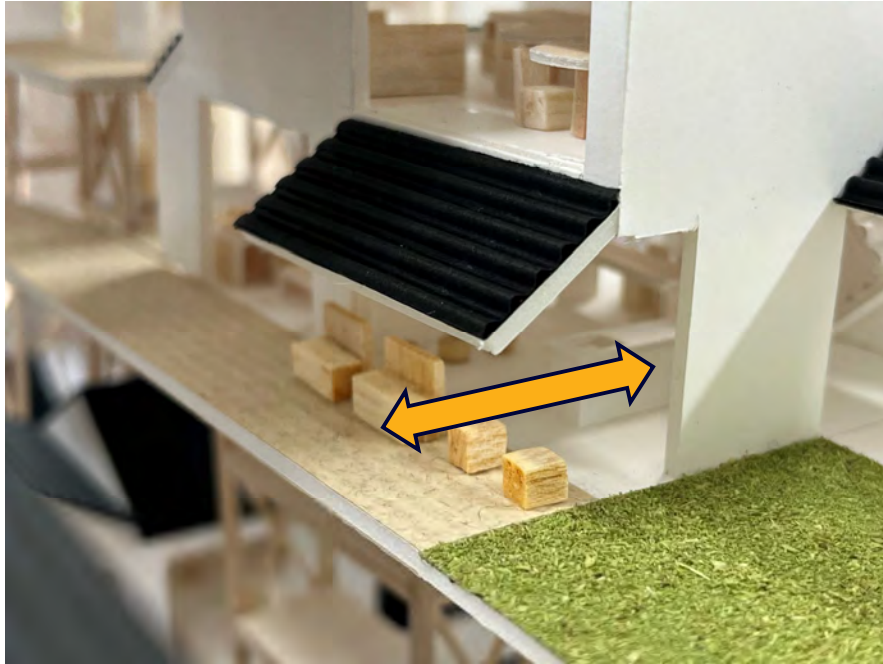


下屋庇によって生まれる空間は、建物と街路をつなぐ中間領域のようになっている。この中間領域は街にとって影響を与えている。

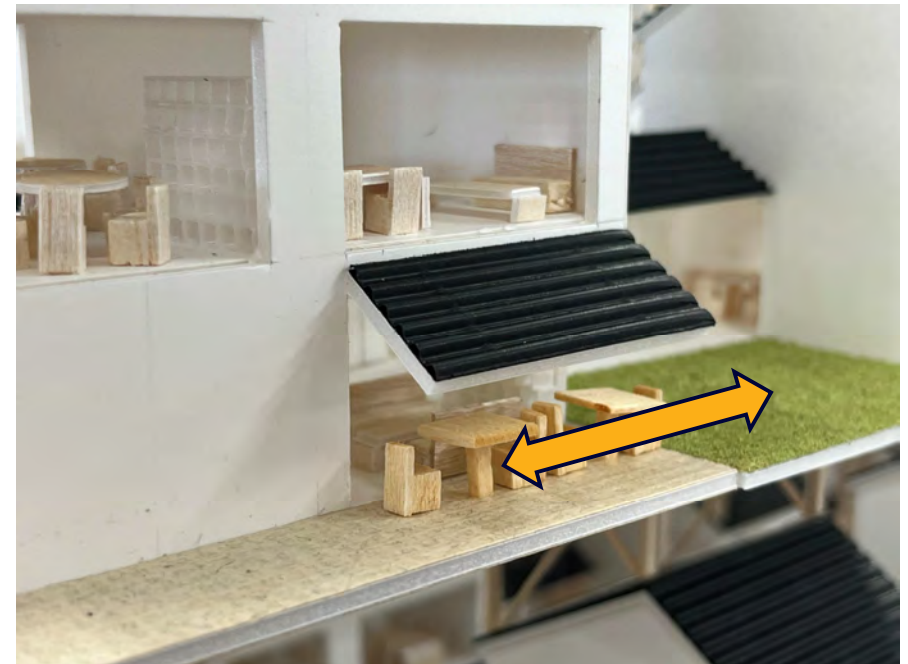


05 設計手法 下屋庇

街路と中庭を結ぶ下屋庇の空間は、半屋外的な販売や休憩スペースとして機能し、建物内部から街路に対して活動がにじみ出ている、中庭に引き込む役割を果たす。そうすることで、建物と街路や中庭との関係性を強めている。



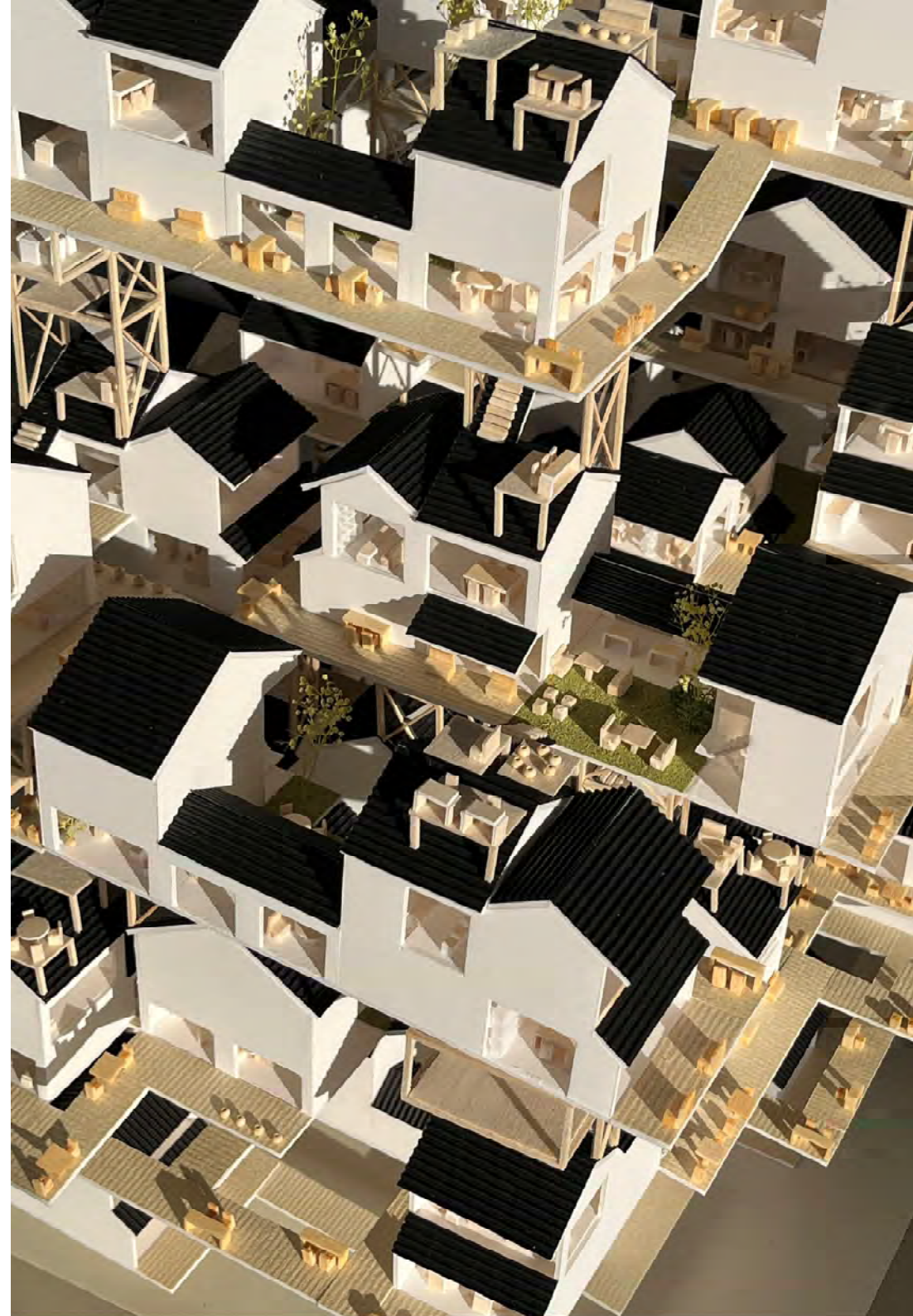
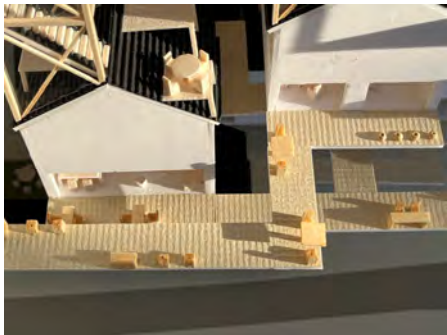
建物と街路を繋ぐ



中庭と街路を繋ぐ

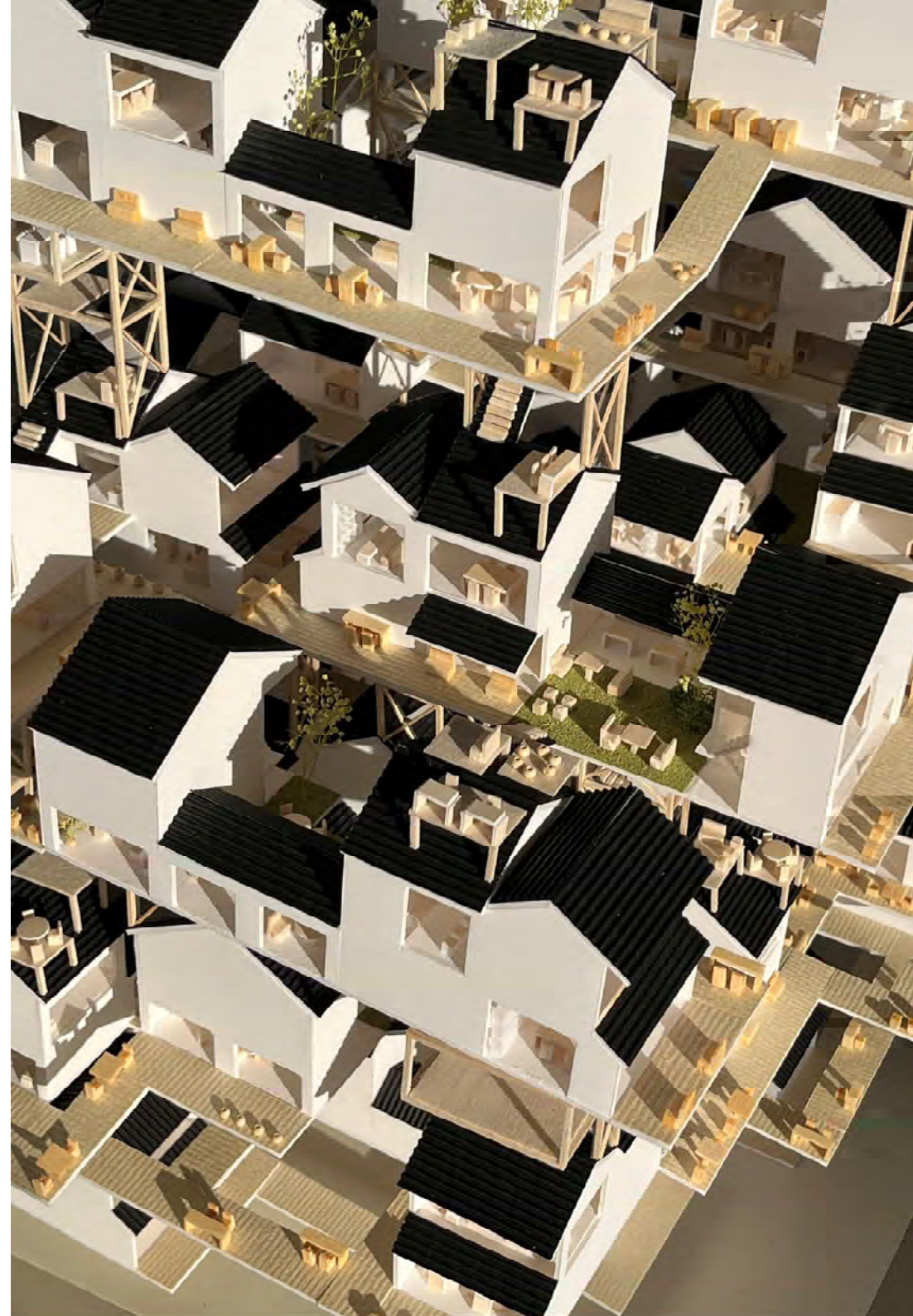
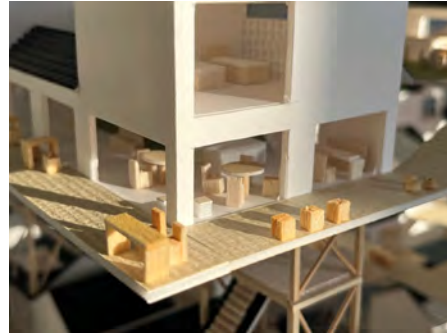
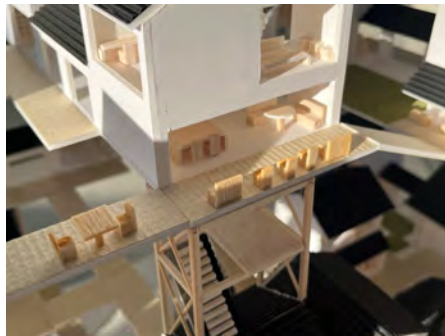
繋がる街路

同レベルで一筆書きのように繋がる街路は、主に来訪者が利用し、店舗間を自由に巡る。中庭に繋がる街路もあり、住人と交流するきっかけとなる。



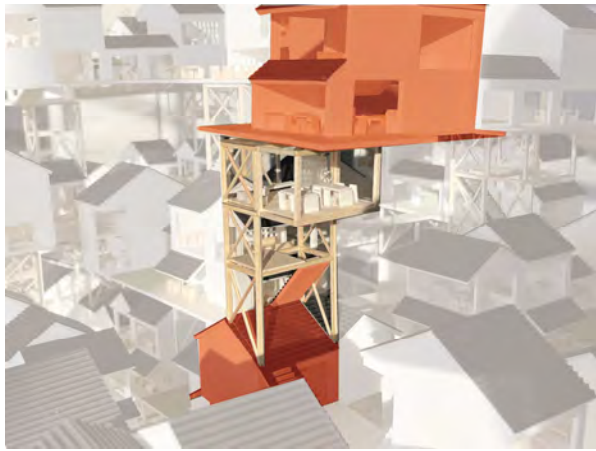
留まる街路

ユニットの1階部分だけでなく、2階部分にも街路が付くなど、様々な場所に街路が張り巡らされている。街路に椅子やソファなどがあることによって、来訪者が街路に留まるきっかけとなる。



07 設計手法 ユニットの高層化

街路によって繋がった各階のユニットを、積層させていくことで高層化を図る。



① 繋いだユニットの床面の構造部を下のユニットの屋根の構造部に重なるように積層



② 上下間を木造の柱梁とブレースによって支える



③ 柱梁の空間化

現代的要素を含む柱梁空間



シェアオフィス



オンライン対応カフェ



立体都市型公園

「歴史の5要素」を活用した各階の空間を支持する柱梁空間は、現代生活を受け入れる空間となる。これにより、歴史性と現代性の融合が完成し、積層させる真意が生まれる。

伝統的建造物群保存地区のシンボル「時の鐘」

伝統的建造物群保存地区において、時の鐘は最も高く、街の歴史性を象徴する存在である。長い間、変わらないリズムで街に時間を知らせ続けてきた。



柱梁

歴史性を活かしたユニットを支える構造体でありながらも、空間として利用し、そこは時代とともに変化する活動を受け入れる器として、先進性を担う。





歴史を保存することは、街の価値を守るために不可欠だが、保存だけでは街は発展しない。時代の変化に応じて新しい生活や活動を受け入れ、人々が交わり続けることで、街は発展していく。培われた歴史性と、育まれる先進性が融合する構成法により、街がより豊かになることを目指す。